

話者の価値判断 : その含意性と異言語への伝達の問題

著者	西原 鈴子
雑誌名	研究報告集
巻	8
ページ	125-157
発行年	1987-03
シリーズ	国立国語研究所報告 ; 90
URL	http://doi.org/10.15084/00001107

話者の価値判断

—その含意性と異言語への伝達の問題—

西原 鈴子

要旨：文はその論理的命題内容のほかに、「言外」の意味を多く含んでいる。それらの中から話者の価値判断を選び、モダリティーの概念の中でそれを把握し、慣用的含意として語の意味素性、法演算子、および表現意図として抽出、分類することを試みた。さらにそれらの諸要因が、異言語間伝達にどの程度耐えるかを探る目的の一環として、日→英翻訳の可能性についてアンケート調査を行なった。本論はその報告である。

キーワード：前提，含意，価値判断，異言語間伝達，日英語

Speaker Value Judgment

—Conventional Implicature and Inter-lingual Communicability—

Suzuko Nishihara

Abstract:

The objective of this paper is to propose the following points:

1. Modality, when interpreted as the indication of a speaker's modal attitude, has epistemic and pragmatic aspects.
2. Such modal aspects are implicated, as well as overtly lexicalized, and can be analyzed in terms of semantic features in the lexical items, modal operators and/or speaker's pragmatic intentions.
3. Speaker value judgment, together with truth-value judgment, is an important constituent of conventionally implicated modal attitude.
4. The strategy for inter-lingual communicability of implicated modal attitude is yet to be cultivated. At present, there is no viable method to show how it might best be achieved.

Key words: value judgment, conventional implicature, inter-lingual communicability, Japanese and English.

1. はじめに

本論は日本語における「前提」と「含意」に注目し、言語形式に内包される慣用的含意 (conventional implicature)¹⁾ をモダリティーの一側面として認めるとともに、そこに真偽判断のみでなく価値判断も潜在することを提案し、さらにそれを異言語 (英語) に伝達しようとする際の問題点をも併せて探ることを目的としている。主な論点は次のようなものである。

- 1) モダリティーの概念は認識面と運用面を持っている。
- 2) モダリティーには、言語形式の中に直接語彙化される要素と、含意されている要素がある。
- 3) 含意されている認識面のモダリティーは、従来多く研究されて来た「真偽判断」だけでなく、「価値判断」のカテゴリーをも含んでいる。
- 4) 特に複文中に含意される価値判断は異言語 (英語) への伝達が困難である。

2. 「言外の意味」の構造

モダリティーという概念をどう定義するかは種々の理論的可能性を持っているが、ここではごく一般的に、言語形式に直接あるいは間接的に対応する話者の主観を表わす文法的概念と考える。厳密な意味では語用論に属する部分も含めている。

2.1. 話者の主観の体系化

渡辺 (1971, 1978), 芳賀 (1978), 金田一 (1978)²⁾ の陳述論の基礎となったのは、言語形式の中に顕現する話者の主観である。また沢田 (1980), 寺村 (1984), 曾我 (1985) も、話者の心的態度を日本語のモダリティーのもっとも重要な要因であるとしている。日本語の膠着語としての特質から、構文の解析の際に副詞として、および文末に近い位置にモダリティー成分の定位置を予測することも可能である。(久野1974, 寺村1982) それぞれに定位置が予測できることは、言い換えれば、言語形式と直接の対応関係にある話者の心

的態度だけがモダリティーの取り扱いを受けていることになる。それはさらに認識面（述定的陳述）⁹⁾、運用面（伝達の陳述）に分けて考えられている。

言語の認識的な要素と運用的な要素をどう解釈するかは、文一文法と談話文法の境界をどこに引くかという問題も関連して、言語学、論理学、哲学の長年の課題でもあった。Chomsky の標準理論（1965）では深層構造だけが文の意味解釈に関与するとされたが、その後 Jackendoff（1972）の提案によって拡大標準理論に発展し⁵⁾、表層構造でも焦点、前提などの意味解釈が関与するとした。この傾向はさらに修正拡大標準理論の、意味解釈の大部分は Jackendoff のいわゆる関数構造（functional structure）を除いてすべて表層で行なわれる（Chomsky & Lasnik 1977）との提案に発展している⁶⁾。この理論によれば、意味解釈は二段階で行なわれる。話者が母国語について持っている純粹に言語的な知識を記述するものが文一文法であり、その領域は音声表示と論理形式（logical form）を派生するところまでである。その段階で第一の意味解釈が行なわれる。その後、論理形式と常識を形成する信念体系のような他の認知構造に文一文法の意味解釈とは別種の意味規則が適用されて完全な意味が得られるのである。後者の意味規則には文の境界を越えた談話に適用されるものもあり、発話の状況、話者の表現意図などが関与してくるものと考えられる。

日本語における「述定的陳述」に属する語彙（う、よう、だろう、らしい、そうだ、など）は上記論理形式が派生される前の意味規則に適應するものである。命題内容（叙述部分）に対して、その生起、あるいは真偽性に関する話者の予測を表示すると考えられる。そのような話者の認識を反映させ、文法形式の中に顕現させるためには、認識と語彙との間にある特定の選択制限が課されなければならない。Jackendoff は単語の意味素性の一部として法演算子（modal operator）〔未来性〕、〔非現実性〕、〔可能性〕などを認め、その作用域に応じて意味解釈が変わるとしている⁷⁾。日本語のモダリティー表現にも同様の法演算子を認めることによって命題内容との共起関係を明らかにできる可能性がある。また寺村の「説明のムード」語彙（の、ことだ、も、

のだ、はずだ、わけだ、など)は文脈的前提を多く含むことから、第二の意味解釈規則の対象となるものと考えられる。

2.2. 前提と含意

(二つの意味規則の作用域は決して二者択一的なものではない。下の1), 2)の文についても、〔確定性〕(仮称)というような法演算子によって表わされる話者の認識の他に、(a)話者自身の視聴覚的判断によるものかどうか、(b)他の情報源が存在するかどうか、などの要因が語彙の選択制限に関わっていると考えられる。1)は(a)要因がプラス、2)は(b)要因がプラスである。

1) 今年は秋の来るのが早いようだ。

2) 今年は秋の来るのが早いらしい。

また3)においては(b)のプラス性が100パーセントとなり、法演算子〔不確実性〕は意味素性として存在しない。

3) 今年は秋の来るのが早いそうだ。

一方4)の「そうだ」は、(a)を「前提」として〔近未来性〕、〔可能性〕といった法演算子を含む意味素性を持っている。

4) 今年は秋の来るのが早そうだ。

これらの例から、モダリティーに関与する語彙の意味記述は少なくとも法演算子の他に(a)、(b)のような要因についても行なわれなければならないことが分かる。これをモダリティーに含まれる「含意」⁹⁾の問題とし、その概念について以下に考察する。

言語中の「含意」についてくわしく言及した論文に Grice (1975) がある。同論文中で Grice は、ある発話を P するとあたかも同時に P' ということを行ったように聞こえる場合、「P' が含意されている (implicated)」と解釈し、「P' は発話 P の含意 (implicatum)」であるとする。言語形式と直接の対応を持って語彙化された意味を言「内」の意味とすれば、含意された意味は言外の意味であると考えられる。含意はさらに「会話的含意 (conversational implicature)」と「慣用的含意 (conventional implicature)」に分けられる。会話的含意は、言語形式が当然生みだす論理的帰結とは無関係に、発話の当

事者の置かれた特殊な環境や当事者同士の関係から察せられるべき含意である⁹⁾。含意が理解される場合、当事者同士の間には「協調の原理 (cooperative principle)」が成立しており、①必要とされることだけ話す、②真実を語り、偽りを言わない、③当面の問題と関連のあることだけ言う、④明確に、あいまいさをなくし、簡潔を期して言う——という約束がなければならない。

慣用的含意は、より言語形式に密着しており、言語形式の論理的帰結を踏まえて聞き手に悟らせるべき内容である。会話的含意が取り消し可能 (cancelable)、つまり他の表現で言い換えることが可能であるのに対し、これは発話当事者が言語形式の「前提」として慣用的に持っている切り離しの不可能な含意である。具体的には文のタイプ¹⁰⁾や文中の要素¹¹⁾が持っている体系的な「裏」の意味である。

Grice の「含意」は発話された内容が含む言外の意味として把握されているが、さらに広く、文が適切に用いられ、発話が意味をなすための必要条件が考えられる¹²⁾。これは論理的、あるいは現実世界における命題の真偽とは関係なく理解されるべき背景の知識であり、語用論的前提 (pragmatic presupposition)¹³⁾として Grice の含意とは別に理解されるべきものとする。

言外の意味としては、他に皮肉、暗喩、冗談、などが考えられる。また運用面での言語行動としての発話行為も重要であるが、本論では考察の対象としない。以下では日本語における慣用的含意のうち、文中の要素中に見出されるものについて考察する。

3. 話者の価値判断

3.1. 真偽判断と価値判断

2.2.において言及した日本語の述定的陳述においては、法演算子〔(不)確実性〕、〔(近)未来性〕、〔可能性〕などが語彙の意味素性中に存在し、ことからの生起、真偽性についてのモダリティを顕現させると考えた。一方、5)、6)においては動詞 知る、思い込むがそれぞれ先行する命題内容が現実と合致するか否か (真か偽か) をあらわしている。5)は真、6)は偽である。

5) 彼は自分がガンだと知っていた。
6) 彼は自分がガンだと思い込んでいた。
また文修飾の副詞のうち次のようなものは「真偽判断」をあらわしている。(中右1980)

おそらく、多分、もちろん、むろん、きっと、定めし、さぞ、確か、
確かに、明らかに、思うに、考えるに、つらつらおもんみるに、疑い
もなく、ひょっとして、もしかすると、一見(したところ)、願わく
は、わたしの見るところ(では)、わたしの知るかぎり

これらの事実は、すべてモダリティーの認識的側面には真偽判断に関するカテゴリーが存在することを証明するものである。

ただし、真偽判断の副詞とされる上記の例の中にも、話者の「ことの良し悪し」や「好き嫌い」に関する判断が含意されているものがある。7)、8)のちがいは、7)において話者は「彼が来ること」をあまり歓迎していないが、いっぽう8)ではそれを好ましいことと思っているという点にある。

7) おそらく彼は来るだろう。

8) きっと彼は来るだろう。

また9)の願わくはは、真偽判断的意味としては、「今はそうでない」という〔不確実性〕を示すものであるが、話者の「そうあって欲しい」、「そうあることが望ましい」という気持も十分汲み取ることができる。

9) 願わくは今回の交渉が両国に平和をもたらさんことを……
本論ではそのような含意内容を「価値判断」と呼び、さらにそれを「善悪判断」(話者が良いと思うか悪いと思うか)と「好悪判断」(好きか嫌いか)に分けて考える。10)は価値判断に中立な文、11は〔善〕、〔好〕併存の例、12)は〔善〕のみ、13)はやはり中立、14)は〔悪〕であるが〔嫌〕ではない文、15)は〔悪〕、〔嫌〕併存の例である。下線の部分にそれぞれの分類の理由がある。

10) 花子さんは礼儀を知っている。

11) 花子さんは礼儀をわきまえている。

- 12) ニュースを早く知るには、テレビを見るにかぎる。
- 13) 親にだまって結婚したら、何の援助ももらえないでしょう。
- 14) 親にだまって結婚しようものなら、何の援助ももらえないでしょう。
- 15) 知っているくせに、黙っていた。

これらはすべて含意された価値判断であって、モダリティーの定位置に顕現することはない。定位置にあり、しかも価値判断を内包する表現は、寺村の説明のムード要素の中にも存在するが、ものだ、わけだ、ことだの用法の一部には話者の価値判断が含まれる。べきだではそれが一層はっきりしている。) 以下では含意された価値判断に重点を置く。

3.2. 慣用的含意としての価値判断の問題点

慣用的含意としての価値判断を抽出する際、困難となるのは、それがどこまで Grice の定義によるように表現、あるいは語彙に固有であり、どこまで文脈に依存するかを決定することである。それは理論的には、修正拡大標準理論の二つの意味解釈のどちらに属するか、認識と語用のどちらの機能であるかということでもある。16) では明らかに「あつかましい」という形容詞の意味素性の一つとして「悪」「嫌」双方の価値判断のカテゴリーを認めることができるが、17) では副助詞「ばかり」が語修飾ではなく、文修飾である場合にのみ、「悪」の価値判断が含意されていると考えられる。

16) そんな「オンブにダッコ」の態度はあつかまし過ぎる。

17) 太郎はこのごろテレビばかり見ている。

毛利(1980)は条件文の諸問題について論じている中で、18)の文が〈警告〉、〈脅迫〉として成り立つための推論の形式を次のように説明している。

18) If you tease the dog, you will get bitten.

(その犬に手を出すと、かまれるよ)

「犬にかまれる」ことは「わるいこと」である。条件節を P、主節を Q とすれば18)の文は次のように書き表わすことができる。□は〔悪〕の標式である。

18)' If P, $\square Q$

悪いことを避けた方がいいと考えることから、論理的対偶が働き、Pでない方が良い、あるいはPをやめるといふ推論になるのである。

18)'' If P, $\square Q$

↓
-P ← -Q

{Pでない} {Qでないこ
{事が必要} {とを欲する}

この推論では、「かまれること」が聞き手にとって悪いことだというのは現実世界の状況であり、推論に先立つ価値判断は「前提」的なものである。接続助詞「と」が固有に持っている意味素性に呼応して状況が選択され発話に至るとは考えにくい。以下では17)のような例は含めて考えるが、18)のようなものは除外して考える。

3.3. 単語の意味素性としての価値判断

まず個々の語彙の意味素性としての法演算子〔善〕,〔悪〕,〔好〕,〔嫌〕の価値判断の存在を探る。「善」,「悪」などを形態素として持つものは取り上げなかった。また個人の価値観を示すようなものも避けた¹⁴⁾。

名詞

〔善, 好〕

〔悪, 嫌〕

愛敬, 安定, 安心, 意気, いくしみ, 一心, 英気, 英断, おふくわけ, おもいやり, 親心, 恩愛, 恩返し, 恩義, 恩恵, 温情, 甲斐性, 快挙, 儉約, 厚情, 根気, すじがね, 誠意, 精気, 聖戦, 絶技, 絶景, 造詣, 尊厳, 大人, 団欒, 忠義, 忠誠, 長計, 直実, なさけ, 耐従, 熱意, 配慮, はげみ, 繁盛, はやわざ, 名案, 名人, 老練	あまのじゃく, 言い逃れ, いいわけ, いかさま, 言種, 入れ知恵, うそっぱち, おべっか, おべんちゃら, 餓鬼, 劍幕, 巧言, 小細工, さしがね, 些事, したっぱ, 知ったかぶり, しろもの, 弱輩, すてばち, すねかじり, 窃盗, 雑言, 俗事, そらごと, そらとぼけ, 高のぞみ, 駄弁, 短気, 短慮, 茶番, 中傷, 嘲笑, 怒声, 難くせ, にせもの, 抜け駆け, のけもの, 野ば
--	---

なし、廃人、罵声、背信、背徳、
背反、廃物、売名、破約、はらい
せ、蛮声、ひけめ、誹謗、美名、
非礼、不意打ち、風体、触れ込み、
暴挙、ぼろ、風才、まきぞえ、見
殺し、むなくそ、持ちぐされ、疫
病、やけ、安物、濫立、狼籍

形容詞

〔善、好〕

あいらしい、あいくるしい、あ
どけない、いさぎよい、ういう
いしい、うつくしい、うらわか
い、うれしい、おいしい、おと
なしい、おもしろい、かぐわし
い、かんばしい、きよい、すが
すがしい、たくましい、たのし
い、ちからづよい、てばやい、
なさけぶかい、なみだもろい、
ねばりづよい、ほほえましい、
みずみずしい、むつまじい、ゆ
かしい、わかわかしい

〔悪、嫌〕

あきっぱい、あさましい、あじけ
ない、あつかましい、あつくるし
い、あまったるい、あやしい、い
かめしい、いかがわしい、いとわ
しい、いまいましい、いやしい、
いやらしい、うさんくさい、うっ
とうしい、えげつない、おぞまし
い、くさい、くどい、くだらない、
くやしい、けがらわしい、けたた
ましい、けばけばしい、こすい、
こにくらしい、さむざむしい、さ
もしい、しらじらしい、じれった
い、ずるい、せまくるしい、そう
ぞうしい、そっけない、そらぞら
しい、だらしない、つまらない、
どすぐろい、どろくさい、ながた
らしい、なれなれしい、にくい、
にくたらしい、にくにくしい、の
ろい、ばかばかしい、ひどい、ふ

るめかしい、まぎらわしい、まずい、まだるっこい、みにくい、みっともない、むさくるしい、ものものしい、やぼったい、やましい、一がましい、一づらい、一にくい

形容動詞

〔善, 好〕

あざやか、あでやか、いたいけ、いちず、いなせ、うららか、おおらか、かかん、かれん、閑静、かんだい、きちょうめん、きよらか、きれい、けんそん、こんせつ、さわやか、しとやか、しんせん、すうこう、せいじつ、そうかい、ちんちゃく、なごやか、なよやか、にゅうわ、ねっしん、びんそく、ふくよか、ほうじゅん、ほがらか、むく、むじゃぎ、らいらく、りはつ、りゅうちょう、やすらか

〔悪, 嫌〕

あいまい、あくらつ、あさはか、あらわ、いびつ、いや、うすっぺら、おおげさ、おせっかい、(お)そまつ、かるはずみ、奇怪、きけん、きみょう、きらい、こうまん、こっけい、ごうじょう、ごうまん、しゃく、心外、すてばち、たいだ、たかびしゃ、ちゃらんぼらん、なまいき、はすっぱ、はんぱ、ひつう、ひんそう、ふしたら、ふとどき、ぶきみ、ぶっきらぼう、へんくつ、へんてこ、ぼうじゃくぶじん、やけくそ、れいたん、れいこく、ろこつ、ろんがい、わいせつ、わいざつ、

動詞

〔善, 好〕

いそむ、おちつく、かおる、かがやく、かばう、くゆらす、さすける、そよぐ、たたえる、

〔悪, 嫌〕

あおりたてる、あばく、あびせる、あまやかす、ありふれる、いきまぐ、いちゃつく、いらだつ、うご

たむける, なしとげる, ぬきんでる, ひいでる, ほほえむ, みなぎる

めく, うろつく, おこたる, おしかける, おだてる, おちぶれる, おもねる, かこつける, がたつく, がる, くすねる, くちばしる, くらう, けしかける, こうじる, しなだれる, すっぱぬく, せがむ, せしめる, せびる, そそのかす, たかる, たたる, たむろする, ちまよう, つめかける, でっくわす, でっちあげる, なすりつける, ふきこむ, へつらう, ほくそえむ, ほつつく, ぼる, まくしたてる, みくびる, みせかける, むさぼる, むしかえす, もてあます, わだかまる

副詞

〔善, 好〕

うれしいことに, 運良く, きつと, さすがに, 幸いにも, せめて, わざわざ

〔悪, 嫌〕

あいにく, いまさら, 運悪く, おそらく, 折悪しく, 勝手に, 残念ながら, せいぜい, たかが, とどのつまりは, どうせ, どだい, つい, ちっとも, ふこうにして, へたに, みだりに, わざと

擬音・擬態語

品詞分類としては副詞とされるべきものであるが、一するに先行して動詞化することもある。また話者の価値判断を非常に直接的に反映することが多いことから別に分類した。

〔善、好〕

いそいそ、うきうき、うっとり、
 きびきび、こんがり、さくさく、
 さばさば、さらさら、しっとり、
 しっぽり、しゃきっ、すかっ、
 すくすく、すっきり、すべすべ、
 すらり、すんなり、そよそよ、
 ちゃきちゃき、つやつや、てき
 ぱき、にこにこ、のんびり、は
 きはき、ぱりっ、ぴしっ、ぴし
 ゃっ、ぴちぴち、ふっくら、ふ
 わふわ、ふんわり、ほかほか、
 ほのぼの、ぼかぼか、ぼちゃぼ
 ちゃ、めきめき、もりもり、ゆ
 ったり、よちよち、るんるん、
 わくわく

〔悪、嫌〕

いじいじ、いちゃいちゃ、うじう
 じ、うじゃうじゃ、うようよ、う
 ろうろ、うろちょろ、うんざり、
 おずおず、ががつが、ぎすぎす、
 ぎとぎと、ぎょろぎょろ、くさく
 さ、くだくだ、くどくど、けげけ
 ば、そこそこ、ごたごた、ごちゃ
 ごちゃ、じっとり、じとじと、じ
 めじめ、ずかずか、ずげずげ、ず
 んぐり、せかせか、だらだら、ち
 やほや、つんつん、てかてか、て
 らてら、とぼとぼ、にたにた、に
 ちゃにちゃ、にやにや、ぬくぬく、
 ぬけぬけ、ぬっ、ぬらりくらし、
 ねちねち、のほほん、ぼさぼさ、
 ぼさぼさ、びしゃっ、びちゃびち
 や、ぶつくさ、ぶよぶよ、へなへ
 な、へらへら、べたべた、べちゃ
 べちゃ、ぼけっ、ぼさっ、ぼそっ、
 ぼろぼろ、ぼてぼて、べとべと、
 むかむか、むしゃくしゃ、むつつ
 り、むんむん、めらめら、もさっ、
 もじもじ、もたもた、もやもや、
 よぼよぼ、よれよれ、れろれろ、
 わさわさ

3.4. 文脈中に含意される価値判断

次にあげるのは、慣用的含意は表現に特有であっても語彙の意味素性とし

ては価値判断を含むと定義し難い例である。3.2. で指摘したように、言語外のことから、状況と言語形式とは密接な相関関係があり、慣用的含意も、言語形式特有かどうかの判断は微妙であることが多い。以下の例は3.2. のような問題をできるだけ避けて選んである。また認識と運用の境界にあるカテゴリーを、〔善悪〕、〔好嫌〕の下位範疇として書き加えた。それらは純粋な認識判断から発話行為としてのモダリティーに至る中間にある表現意図とでも言うべきカテゴリーである。

名詞句

〔悪〕〔軽い見下げ〕

19) 語学とか文学とかいうものはまっぴらごめんだ。(坊ちゃん)

20) 花子さんのハンドバッグにはガムだの小銭だのがごちゃごちゃに入っています。(ICU 副教材)

21) いろんな、においがして、いままで見たこともないものだらけだった。(窓ぎわのトットちゃん)

22) こんな気に入った学校は、お休みなんかしないで、ずーっとくる。(窓ぎわのトットちゃん)

副詞句

〔善〕〔評価〕

24) お金がなくても、ないなりに楽しいパーティーができる。(ICU 副教材)

動詞句

〔善〕〔感謝〕

25) 今年は雨に恵まれている。(ICU 副教材)

〔善〕〔好感〕〔賞賛〕

11) (上記) 花子さんは礼儀をわきまえている。(ICU 副教材)

〔善〕〔選択〕

12) (上記) ニュースを早く知るには、テレビを見るにかぎる。(ICU 副教材)

〔悪〕〔被害〕

26) ハイキングの途中で雨に降られて、さんざんな目にあった。(ICU 副教材)

〔悪〕〔悪行〕

27) このごろは目の前で事件を目撃しても、見て見ぬふりをする人が多い。(ICU 副教材)

他の文末表現

〔善〕〔感銘〕

26) リーさんはよくそんなに長い時間勉強を続けられるものですね。(ICU 副教材)

〔善〕〔ひかえめな評価〕

29) 山田さんはまんざらお酒が嫌いでもなさそうです。(ICU 副教材)

〔悪〕〔不本意〕

30) 寝るわけにもいかない。(坊ちゃん)

31) 親のゆずりの無鉄砲で子どものときから損ばかりしている。(坊ちゃん)

32) 私は有為子の顔がこんなに美しかった瞬間は、彼女の生涯にも、それを見ている私の生涯にも二度とあるまいと思わずにはいられなかった。(金閣寺)

33) 砂に対する関心も、いやがうえにも高まらざるを得ない。(砂の女)

〔悪〕〔反発〕

34) いくら月給で買われたからだだって、あいた時間まで学校へしぱりつけて、机とにらめくらをさせるなんて法があるものか。(坊ちゃん)

35) うそをつきやがった。(坊ちゃん)

〔悪〕〔危惧〕

36) 眠りは浅く、悪い夢を見がちだった。(眠れる美女)

- 37) 小笠原諸島は突風が吹くおそれがあります。(天気予報)
- 38) 彼にそんなことを言うのは、眠っている子供を起こすようなことになりかねない。(ICU 副教材)

〔悪〕〔見下し〕

- 39) しかしこんなのはほんのささやかな一例に過ぎません。(人間失格)
- 40) ちっともわかっていやしなかったのです。(人間失格)
- 41) 人生の西も東もてんで解っていない。(猟銃)
- 42) 自分が本当に腹を立てているのかそうでないのか、はっきりしない始末なんだよ。(万延元年のフットボール)

〔悪〕〔あきらめ〕

- 43) 搜索願も、新聞広告も、すべて無駄におわった。(砂の女)
- 44) いずれ砂の法則にさからえるはずもない。(砂の女)
- 45) あなたの手腕でゴルキなんですから、わたしなんぞがゴルキなのはしかたがありません。(坊ちゃん)

〔悪〕〔不満〕

- 40) それだけが私にふさわしく思われる、鮮度の落ちた現実、半ば腐臭を放つ現実が横たわっているばかりであった。(金閣寺)
- 47) あなたがもう少し年をとっていらっしやれば、ここがご相続ができますものを。(坊ちゃん)

副詞節 (従属節末)

〔善〕〔感銘〕

- 48) さすが中国人だけあって、マさんは筆を上手に使いますね。(ICU 副教材)

〔善〕〔感謝〕

- 49) 江口老人は道楽をつづけているおかげで、女の言う「安心できるお客様」ではまだない。(眠れる美女)

〔善〕〔決意〕

- 50) 家を売ってでも子供を大学にやるつもりだ。(ICU 副教材)
〔悪〕〔仮定〕(主節は結果の予測)
- 51) このままにすましては、おれの顔にかかわる。(坊ちゃん)
- 52) 泣き寝入りしたと思われちゃ一生の名折れた。(坊ちゃん)
- 53) いくら一人で不平をならべたって通るものじゃないそうだ。(坊ちゃん)
- 54) 千メートル走って息を切らせている様では、とうていマラソンは無理でしょう。(ICU 副教材)
- 55) 他人に喋ったり、かんづかれたりしたら、たちどころにお前の首は飛ぶ。(敦煌)
- 56) 下宿の窓にふとんを干してきたので、雨でも降ろうものなら大変です。(ICU 副教材)
〔悪〕〔仮定〕〔あきらめ〕
- 57) 田中さんにいま忠告したところで、無駄ですよ。(ICU 副教材)
〔悪〕〔要約〕〔批判〕
- 58) なに不足なく暮らしている上に、生き物を殺さなくちゃ寝られないんて、ぜいたくな話だ。(坊ちゃん)
〔悪〕〔軽蔑〕
- 59) 弱虫のくせに四つ目垣を乗り越えて栗をぬすみにくる。(坊ちゃん)
〔悪〕〔僭越〕
- 60) 自分を犠牲にしてまで、他人のために働こうとは思わない。(ICU 副教材)
〔悪〕〔原因・理由〕〔被害〕
- 61) 昨晚おそくコーヒーを飲んだせいで、眠れなくて困った。(ICU 副教材)

4. 異言語（英語）への伝達の問題

4.1. 透明—不透明文脈と翻訳における理解の問題

上に挙げられた慣用的含意の例では、文の「意味」は(a)論理記号に還元できるような命題内容、(b)含意された認識としての価値判断のモダリティ、(c)運用面の意味の少くとも三層を持っている。日常の言語生活における運用の場面では、日本人の話者・聞き手が「協調の原則」に従っているかぎり、そこに誤解の可能性はない。しかし、多層構造の意味が、言語の境界を越えて伝達されるべき翻訳の壁を通してどこまで対応関係を見出し得るかは別個の問題となって来る。

問題の第一は、理解における意味の不透明性 (opacity) であろう。透明 (transparent) な文脈においては、解釈は一つしかあり得ないが、不透明な (opaque) 文脈においては複数の意味解釈が可能となる。この概念は元来、不特定名詞の特定性に関して展開されたものであるが¹⁵⁾、含意されたものを含む文脈において上記(a)(b)(c)すべてに透明な読みができるためには、Griceの言う協調の原理だけではなく、前提をも含めたあらゆる意味解釈の場面で、話者と聞き手が共通の知識を共有していることが必要とされる。

第二の問題は、含意されている内容が異言語間で必ずしも一致していないという問題である。たとえば、英語の「bachelor」には①結婚していない成年の男子、②学士号保持者、③若い騎士、④（繁殖期に）相手のない雄、特におっとせい、の意味があるが¹⁶⁾、日本語の「独身者」にはいずれの意味もなく、(①が女子の場合を含まないため) わずかに①の部分的な共有があるのみである。しかし一般的な英—日翻訳として、「He is a bachelor」は「彼は独身だ」が通用している。また「風がそよそよ吹いている。」を英語に翻訳して「The breeze blows lightly」¹⁷⁾とすると、そよそよの意味は breeze に含まれ、語対語の翻訳としては含意される「気持ちのよさ」が移動していることになる。

そのようなことがらについて、特に日本語から英語への慣用的含意伝達の

問題点を取り上げて調査した結果を次に報告する。

4.2. 日→英翻訳の可能性

調査は昭和61年9月、国際基督教大学の Semantic Theory and Translation という課目を受講している学生23名を対象に行なった。調査内容は二項目あり、(1)日本の小説で、英訳出版されているものから日本語の価値判断を内包する慣用的含意の例を提示し、それが適切に翻訳されているかを判断すること、(2)日本語文を含意に留意しつつ英訳すること、の二つの作業を依頼した。23名の国籍は全員日本、母語は日本語である。このグループの特色は、全員かなり英語能力に自信を持ち、内9名は「まあまあ」パイリンガルであると自認していることである。パイリンガルであると考える9名のうち7名は海外(英語国)に1年以上滞在した経験を持っている。また後日、英語を母国語とし、日本滞在6年になる翻訳を職業とする外国人インフォーマントに同じ質問をし、答えを比較した。下にその結果を示す。各々の翻訳について、全体として適当な訳となっているかをまず(イ)適当、(ロ)まあまあ、(ハ)不適当の3段階に選別し、次に特に下線の部分(慣用的含意を持つ表現)について同じく3段階評価を依頼した。下線部分以外の、全体としての含意について質問したのは、4.1.で問題の一つとした含意の移行の可能性を知るためである。

下線の部分について、「適当」が「不適当」を上回ったのは、次のような文においてである。「まあまあ」は考慮から外した。

- | | |
|---|---|
| (a) 今から考えると ばかばかしい 。(ぼっちゃん) | Looking back on it now it seems ridiculous. |
| (b) トットちゃんは 未練がましく 、箱をのぞきこみながらいった。(窓ぎわのトットちゃん) | Totto-chan gazed longingly into the box and went on. |
| (c) 親ゆずりの無鉄砲で子ども のときから損ばかりし | Ever since I was a child, my inherent recklessness has brought me nothing |

- ている。(ぼっちゃん) but trouble.
- (d) しかしこんなのはほんの This, however, is only a minor
ささやかな一例に過ぎま example.
せん。(人間失格)
- (e) 私は有為子の顔がこんな I could not help thinking that never
に美しかった瞬間は彼女 again would there come a time
の生涯にも、それを見て either in Ueko's life or in the life of
いる私の生涯にも二度と myself, the onlooker, when her face
あるまいと思わずにはい would be as beautiful as it was at
られなかった。(金閣寺) this instant.
- (f) いずれ砂の法則にさから No matter what they did, he mused,
えるはずもないのに。 there was no escaping the law of
(砂の女) the sand.
- (g) おやじはちっともおれを My father never showed me the
かわいがってくれなかつ slightest affection.
た。(ぼっちゃん)
- 反対に、「不適當」が「適當」を上回った例は次のようなものである。
- (h) ことに語学とか文学とか I particularly wanted no part of
いうものはまっぴらごめ languages or literature.
んだ。(ぼっちゃん)
- (i) この家は、いささか我慢 The house itself would have been
しかねるしろものだっ difficult to put up with.
た。(砂の女)
- (j) 湘南にごくありふれた海 a single-story building similar to
浜寮風の平屋建て (万延 the beachside hostels to be found all
元年のフットボール) over the Shonan area.
- (k) おたがいになごやかな徴 (They) whiled away the hours in the
笑をかわしあいながら, sun-room, or in the lawn exchanging

- サンルームや芝生で時を
 すごすのである。(同上)
- (l) 自分の作品が「猟銃」と
 いうもっともらしい題は
 付けられているもののお
 よそこの雑誌には不似
 合いのもので……(猟銃)
- (m) そこへ老師が折悪しく廊
 下をとおって来て、女の
 姿をみとめて玄関先へ出
 た。(金閣寺)
- (n) 娘の頬のみずみずしいほ
 ほえみとそっくりであっ
 た。(眠れる美女)
- (o) 不安がそれ以上こうじな
いうちに、休憩もかねて、
 穴の標型をつくり、たし
 かめてみることにした。
 (砂の女)
- (p) 一軒だけの雑貨屋の店先
にたむろしていた髪^の薄
 くなった女たちも一瞬そ
 の手や口を休め、いぶか
 るような視線をなげかけ
 てきた。(砂の女)
- (q) これも親ゆずりの無鉄砲
 がたたったのである。
 (ぼっちゃん)
- happy, untroubled smiles.
- In spite of its plausible title, the
 poem was entirely out of place in
 that magazine, ...
- At the moment the Superior unfor-
 tunately happened to be coming
 along the corridor.
- It was exactly the fresh smile on
 the girl's cheek.
- Rather than worry further, he deci-
 ded to take advantage of a rest
 period and put his theory to the
 test by constructing a model of the
 hole.
- Thin haired women were gathered
 in front of the single general store.
 All movement ceased for a moment
 as they looked curiously at him.
- Once again that impetuosity with
 which I was cursed.

- (r) おじさまと母さんの事を
ふと思い浮かべただけで
たちまち私を取り巻く世
界は全く変わったもの
になって仕舞うのです。
(猟銃)
- (s) 眠りは浅く、悪い夢を見
がちだった。(眠れる美
女)
- (t) 自分が本当に腹を立てて
いるのか、そうでないの
か、はっきりしない始末
なんだよ。(万延元年の
フットボール)
- (u) 今のようじゃ人の前へ出
て教育を受けたとはいば
れないから、つまり損に
なるばかりだ。(ぼっち
ちゃん)
- (v) 江口老人は道楽をつづけ
ているおかげで女の言う
「安心できるお客様」では
まだない。(眠れる美女)
- (w) つい眼をそむけたくな
る。(人間失格)
- As soon as I think about you and
mother, everything around me is
different.
- He was a light sleeper, given to bad
dreams.
- He himself hardly knew whether
he was really angry or not...
- I couldn't, as things stood at the
moment, boast to people that I had
had an education, which would mean
that any such business would end
in failure.
- Still able to enjoy himself, he was
not yet a guest to be trusted.
- In the end I want to avert my
eyes.

不適當とされた例のうち、全体として〔適當〕が〔不適當〕を上回ったのは (j) のみであった。また〔まあまあ〕を〔適當〕と見なしても依然として〔不適當〕とされたのは (q), (r), (s), (w) であった。他の例では〔適當〕〔不適當〕

当]がほぼ同数であった。以下にそれらを示す。

(x) 「ちょっとした療養機関 They've decided I should shut myself
にとじこもることになっ up in a kind of Sanitarium.
たのさ。」(同上)

(y) 支那人の監督の眼が届く When the eyes of the Chinese
時はいかにも懸命に働い overseer were upon him he made a
ているように見せかけて show of working all his might, but
いたキチジローは、監督 when the overseer went away he
から離れるとすぐ怠けは immediately began to idle.
じめ……(沈黙)

(z) どろどろにとけてなにか Like a dam, the dry, parched skin
えたいのしれぬものにか held in the sweet-sour, rosy cells
わった甘酸っぱいばらい that had dissolved and changed into
ろの細胞を、渴した皮膚 somethething indescribable.
がダムのようにせきとめ
ている。(万延元年のフ
ットボール)

(aa) なに不自由なく暮らして It seems like gross overindulgence
いる上に、生き物を殺さ to me that a man living a perfectly
なくちゃ寝られないなん comfortable life has to kill living
てぜいたくな話だ。(ぼ things to get a good night's sleep.
っちゃん)

(bb) 弱虫のくせに四つ目垣を But, in spite of this, he used to
乗り越えて、栗をぬすみ climb over the trellis fence and
にくる。(ぼっちゃん) steal the chestnuts.

外国人インフォーマントは、(a), (b), (c), (e), (f), (g), (k), (s), (aa), (bb),
を〔適当〕, (h), (l), (o), (r), (u), (w)を〔不適當〕と答えた。

一番多かったのは「まあまあ」という答えである。特に文全体としてどう

かという質問に関しては、(c), (g), (q)を除いてすべてに「まあまあ」という答えが多数を占めた。これは「まあまあ良い」、「そんなに悪くない」「あまり適当とは言えない」の少くとも3通りの解釈を許すが、それらをすべて完璧ではない」という意見と考え、上記の例文のような表現の英語への翻訳には含意内容の移行に問題があるという指摘だけに留めることとする。

第二の調査項目では、日本人学生の翻訳試案（含意されたニュアンスを最も良く反映する訳）について、外国人インフォーマントに含意内容を説明した上、同じく〔適当〕、〔まあまあ〕、〔不適当〕の3段階評価を依頼した。翻訳される前の日本語文は次のようなものである。

文(1) 親にだまって結婚しようものなら、何の援助ももらえないでしょう。

文(2) お金はなくともないなりに楽しいパーティーは計画できる。

文(3) 千メートル走って息を切らせているようじゃ、とうていマラソンは無理だね。

文(4) 昨晚おそくコーヒーを飲んだせいで、眠れなくて困った。

文(5) 家を売ってでも子供を医学部に入れるつもりだ。

文(6) 自分を犠牲にしてまで他人のために働こうとはおもわない。

文(7) へたにお金のことにくわしいのは出世のさまたげになった。

文(8) さすが中国人だけあって、リンさんは筆を上手につかいますね。

文(9) 山田さんはまんざらお酒がぎらいでもなさそうですね。

文(10) 田中さんにいま忠告したところで無駄ですよ。

翻訳するのは不可能だとした学生も数人いた。そのような学生が多かったのは自分がバイリンガルではないと考えたグループであった。バイリンガルだと自認した学生は全員が翻訳を試みている。そのようなことから、外国人インフォーマントの評価はバイリンガル対非バイリンガルグループに二分されるという予想を立てたが、結果には全く違いが見られなかった。10の文中、外国人インフォーマントが「適当」と考えた訳を過半数の学生が書いた例は皆無だったからである。以下に各々の日本文についての外国人インフォーマ

ントの試訳と、含意された価値判断をどう英語で伝達できるかの工夫を示す。

文(1) If you $\left\{ \begin{array}{l} \text{do get} \\ \text{should ever get} \\ \underline{\text{are going to get}} \end{array} \right\}$ married without telling your parents, you can't expect any help from them.

{ } の中のような強調構文を使うことによって、「しない方がよいことがら」という〔悪〕の含意を伝達する。

文(2) We could still have a great party without using a lot of money.

“still” という副詞によって「逆境ではあるが積極的に」という〔善〕〔評価〕を示す。

文(3) You won't be able to run a marathon if you're all puffed out after a thousand meters.

“all puffed out” という口語的な表現でことがらの質を下げ、好ましくないことがらであるということを示す。

文(4) I had trouble sleeping last night thanks to late up of coffee.

“thanks to” は日本語の「おかげで」が皮肉をこめて使われるのと同様、逆効果をねらって使用している。

文(5) Even if it means having to sell my house, I intend to send my children to medical school.

“have to” という「したくないがしななければならない」ことを意味する表現で「てでも」の持つ含意を代用させている。

文(6) I don't intend to work for some one if it means sacrificing myself.

“if it means...” を使って「望ましくない成り行き」を表わす。

文(7) My knowledge of finance only gets in the way of my promotion.

これはインフォーマントが「へたに」の否定的意味の伝達方法

を無視したか理解しなかったかのどちらかであろう。

文(8) You can see your Chinese background, Lin. You hold the
bruh well.

この文においてもインフォーマントは〔善〕〔感銘〕のニュアンスを無視している。ただしことがら的には良い印象を述べている。

文(9) Yamada doesn't seem to have a total aversion to saké.

この英語から「ひかえめな評価」を読み取ることは困難であろう。それは文脈的補足に待たなければならない。

文(10) You'd better save your advice for Tanaka for the moment.

ここにも「あきらめ」の気持は含まれていないであろう。

これらの試案から短絡的に結論を引き出そうとすることには危険が伴う。可能な一つの結論は「異言語間で含意された価値判断を伝達することはできない」というものであるが、異言語間コミュニケーションが必要不可欠となった今日、それは出してはならない結論であろう。文(1)(2)(3)の例のように含意された価値判断の内容を移行させたり他の言語的伝達手段（音調など）に訴えることによって問題の解決をはかることも一助となるであろう。また、学生達の翻訳の多くが自国語の含意内容に忠実であろうとして英語における自然さを犠牲にしていたこと¹⁸⁾、外国語学習においては理解能力が常に運用能力を上回ることから、外国語→自国語への翻訳にその逆よりも信頼を置くことなど、留意すべき点であろう。

4.3. 今後の展望

調査項目(1)では〔適当〕とされた文例は皆比較的単純な文構造を持つものであった。反対に〔不适当〕とされた文例は連体修飾構造をも含めて複文的構造を持つものが多かった。また調査項目(2)では10文中8文までは従属節中に含意内容が含まれていた。特に複文中においては3.2.で指摘したように、含意された価値判断は命題内容そのものと相関関係を持つことから、従属節末に存在する慣用的含意は文の背景である前提を言語化させる機能を持って

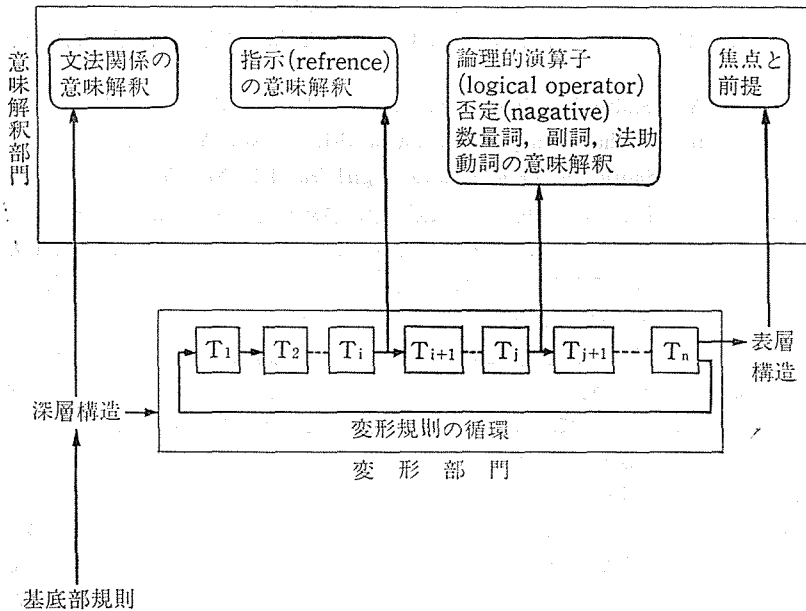
いると言える。それをより正確に記述し、認識のカテゴリーを確立させた上で、それに一番合致する意味素性あるいは法演算子を持つ表現を英語からも抽出対照することが今後の課題となる。また英語の中にある同様な価値判断のカテゴリーを、日本語中の表現と比較対照することも必要であろう。それに先立って命題論理、様相論理、義務論理を駆使することによる両言語のより普遍的かつ抽象的な記述がなされなければならないと考える。特に価値判断の語彙化、含意両面に重要なポイントとなる「否定」の意味解釈をさらに明確にする必要がある。

5. おわりに

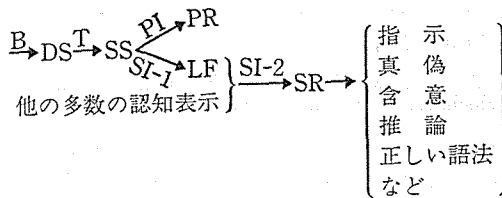
資料の収集およびアンケート調査には多くの協力者を得た。用例のカード化にはアルバイトの伊藤啓子、高田悦子両氏の協力を得た。また貴重な授業時間をさいて調査に御提供下さった山梨大学の沢登春仁教授、国際基督教大学の学生諸君、インフォーマントとして御意見をきかせて下さった Wendy Spinks 氏に感謝する。

注

- 1) 用語は Grice (1975) による。
- 2) 引用文献、参考文献の中には、論文として出版されたものが、後に単行本として編集、収録されたため、執筆年と単行本の出版年に大きな差のあるものがある。本論では最近のものを採用した。
- 3) () 中の用語は芳賀 (1978) による。
- 4) 寺村 (1984) の「概言のムード」、「説明のムード」の区別もそれを踏まえてのことであろう。また久野 (1978) では「視点」は認識寄り、「省略」は運用寄りの概念であると言える。
- 5) 拡大標準理論による意味解釈のしくみを図示すると次のようになる。



6) 修正拡大標準理論の意味解釈は次のように図示できる。



B=基底部規則
 DS=深層構造；PI=音声解釈
 T=変形規則；PR=音声表示
 SS=表層構造（厳密には、浅い構造）
 SI=意味解釈；LF=論理形式；SR=意味表示

- 7) たとえば { a John wants to catch a fish.
 b There is a fish that John wants to catch. } では fish が want の作用を受けているか否かによって b ではある特定の fish, a では特定、不特定両方の意味になり得る。
- 8) 「含意」は論理的含意 (entailment) としても用いられる。これは $P \supset Q$ と表示される関係において、P が真であるとき Q も真、偽であるとき Q も偽であるような関係を指している。以外においてはその意味ではなく、命題の真偽とは独立

した「implication」の意味で「含意」という語を使用する。

- 9) たとえば次のような会話において () 内の内容が話し手と聞き手の間で理解されている。

A “Smith doesn't seem to have a girl friend these days.”

B “He has been paying a lot of visits to New York lately.”

(Smith has, or may have, a girl friend in New York.)

- 10) たとえば「質問文の運用において話し手は答える側が答えを知っていることを期待している。」がそれに当たる。したがって、「ネクタイ売場はどこですか」という質問には、(この店にはネクタイ売場がある)という事のほかに(この人は答えを知っている筈だ)ということが含意されている。
- 11) 「太郎の息子も背が高い」という文は(太郎には息子がいる)、(太郎あるいはある特定の誰かは背が高い)が含意されている。前者は所有の意味をあらわす「の」、後者はとりたて助詞「も」の慣用的含意と考えることができる。
- 12) たとえば(注)9)の例における(この店にはネクタイ売場がある)ということ。
- 13) Karttunen (1977) 参照。
- 14) 叙述形容詞(安い, きつい, あまい)に対する感じ方は個人とその環境によって変化すると考えられる。用法によっても善悪の価値判断は分かれることがある。たとえば「頭がかたい」は悪い, 好ましくないことだが, 「成功は8割がたかたい」は善い, 好ましいことである。同様に, 「あの人は言うことが小さい」は悪い価値判断, 「この花は可憐で小さい」は善い価値判断である。
- 15) Jane Fodor (1979) では,
- { a. He is looking for whichever boy failed the exam.
b. He hit whichever boy failed exam }
- whichever は不特定すなわち不透明 (opaque) な読みしか存在しないが, b. の場合は特定すなわち透明 (transparent) な読みができると指摘している。
- 16) 『新英和大辞典』(1960) 研究社出版
- 17) 『日英操音操態語活用辞典』(1984) 北星堂
- 18) たとえば文例(10)で, ある学生が提案した翻訳は次のようなものである。
- It's no use trying to advise Mr. Tanaka at this time.
- 筆者にはよく含意内容を伝えたものに思えたが, 「まあまあ良い」の判定しか得られなかった。

参 考 文 献

- Atlas, Jay David (1976) “How Linguistics Matters to Philosophy: Presupposition, Truth, and Meaning”. in Oh & Dinneen (eds). *Syntax and Semantics 11 Presupposition*. New York/London: Academic Press.

- Austin, John L. (1962) *How to Do Things with Words*. New York: Oxford University Press. (坂本百大訳『言語と行為』大修館書店 (1978))
- Bourne, Lyle et al. (1976) *Cognitive Processes*. Eaglewood Cliffs: Prentice Hall.
- Caton, Charles (ed.) (1971) *Philosophy and Ordinary Language*. Urbana: University of Illinois Press.
- Chomsky, Noam (1965) *Aspects of the Theory of Syntax*. Cambridge: MIT Press.
- (1980) *Rules and Representations*. New York: Columbia University Press.
- Chomsky, Noam & H. Lasnik (1977) "Filters and Control". *Linguistic Inquiry* 8.
- Fillmore, Charles J. (1971) "Verbs of Judging: An Exercise in Semantic Description". in Fillmore & Langendoen (eds.) *Studies in Linguistic Semantics*. New York: Holt, Rinehart & Winston.
- Fodor, Janet (1979) *The Linguistic Description of Opaque Contexts* New York: Garland Publishing.
- Grice, H. P. (1975) "Logic and Conversation". in Cole & Morgan (eds.) *Syntax and Semantics 3 Speech Acts*. New York/London: Academic Press.
- (1978) "Further Notes on Logic and Conversation". in Cole & Peter (eds.) *Syntax and Semantics 9 Pragmatics*. New York/London: Academic Press.
- (1982) "Meaning Revisited". in Smith, N. V. (ed.) *Mutual Knowledge*. New York/London: Academic Press.
- Horn, Laurence R. (1985) "Metalinguistic Negation and Pragmatic Ambiguity" *Language* Vol. 61, No. 1.
- Jackendoff, Ray (1972) *Semantic Interpretation in Generative Grammar*. Cambridge: MIT Press.
- (1983) *Semantics and Cognition*. Cambridge: MIT Press.
- Karttunen, Lauri (1971) "Implicative Verbs". *Language* 47, Vol. 12.
- (1977) "Presupposition and Linguistic Context". in Rogers, Wall & Murphy (eds.) *Proceedings of the Texas Conference on Performatives, Presuppositions and Implicatures*. Arlington, Virginia: Center for Applied Linguistics.
- Karttunen, Lauri & Peters, Stanley (1975) "Conventional Implicature in

- Montague Grammar". *Proceedings of the First Annual Meeting of the Berkeley Linguistic Society* Vol. 1. Berkeley: University of California Press (1971).
- (1979) "Conventional Implicature". in Oh & Dinneen (eds.) *Syntax and Semantics 11 Presupposition*. New York/London: Academic Press.
- Kempson, R. M. (1975) *Presupposition and Delimitation of Semantics*. Cambridge: University Press.
- Leech, Geoffrey (1974) *Semantics*. Harmondworth, England: Penguin Books
(安藤貞雄監訳『現代意味論』 研究社出版 (1977))
- Morgan, J. L. (1975) "Some Interaction of Syntax and Pragmatics". in Cole & Morgan (eds.) *Syntax and Semantics 3 Speech Acts*. New York/London: Academic Press.
- Muraki, Masatake (1974) *Presupposition and Thematisation*. Tokyo: Kaitakusha.
- Quine, W. V. O. (1960) *Words and Object*. Cambridge: MIT Press.
- Sadock, Jerrold M. (1974) *Toward a Linguistic Theory of Speech Acts*. New York: Academic Press.
————— (1978) "On Testing for Conversational Implicature".
- Wilson, Deirdre & Sperber, Dan (1979) "Ordered Entailments: An Alternative to Presuppositional Theories". in Oh & Dinneen (eds.) *Syntax and Semantics 11 Presupposition*. New York/London: Academic Press.
- van Dijk, Teun A. (1977) *Text and Context: Explorations in the Semantics and Pragmatics of Discourse*. London/New York: Longman.
- 荒木一雄 (他) (1982) 『文法論』(現代の英文法1) 研究社出版
- 板坂元 (1971) 『日本人の論理構造』 講談社現代新書 420
- 井上和子 (1983) 「文—文法と談話文法の接点」『言語研究』84
- 上野田鶴子 (1982) 「モダリティ— 日本語・英語」『講座日本語II, 外国語との対照II』 明治書院
- 内田種臣 (1977) 「様相論理と言語」『言語』Vol. 6, No. 13
- 尾野秀一 (1984) 『日英擬音・擬態語活用辞典』 北星堂
- 河上誓作 (1980) 「構造から機能へ」『言語』Vol. 9, No. 12
- 川端善明 (1983) 「副詞の条件」—叙法の副詞組織から— (渡辺実編『副用語の研究』 明治書院)
- 金田一春彦 (1978) 「不変化助動詞の本質」『日本の言語学』第三卷 文法I 大修館書店
- 工藤浩 (1982) 「叙法副詞の意味と機能」—その記述方法をもとめて—『研究報告

集』3 国立国語研究所

- 久野暉 (1978) 『談話の文法』 大修館書店
- 国広哲弥 (1970) 『意味の諸相』(ELEC 言語叢書) 三省堂
- (1981) 「翻訳の言語学」『言語』Vol. 10, No. 12
- 沢田治美 (1980) 「日本語『認識』構文の構造と意味」『言語研究』78
- 示村陽一 (1982) 「日英比較にみる日本型コミュニケーションの考察」『国語学論説資料』19 第一分冊 論説資料保存会 (関西外国語大学研究論集36)
- 白井賢一郎 (1985) 『形式意味論入門』 産業図書
- 杉戸清樹 (1984) 「談話の単位について」『言語生活』393
- 曾我松男 (1985) 「モダリティーの範疇についての一考察」『日本語教育』57
- 高橋太郎 (1978) 「「も」によるとりたて形の記述的研究」『研究報告集』1 国立国語研究所
- 田島節夫, 坂本賢三, 市川浩, 坂部恵, 村上陽一郎編 (1977) 『言語の内と外』 弘文堂
- 田中卓史 (1985) 「概念情報処理」『研究報告集』6 国立国語研究所
- 田中望 (1983) 「談話の研究」『言語生活』381
- 張麟声, 渡辺実 (1983) 「日中副詞の比較」—ムード副詞を中心に— 渡辺実編『副用語の研究』 明治書院
- 寺村秀夫 (1982) 『日本語のシンタクトと意味』第一巻 くろしお出版
- (1984) 『日本語のシンタクスと意味』第二巻 くろしお出版
- 中右実 (1980) 「文副詞の比較」『日英比較講座 第二巻 文法』 大修館書店
- (1984) 「質疑応答の発想と論理」『日本語学』3巻4号
- 中野洋 (1985) 「語義記述法の問題点」『朝倉日本語新講座』4 文法と意味Ⅱ 朝倉書店
- 永野賢 (1951) 『現代語の助詞・助動詞一用法と実例一』 国立国語研究所報告3
- 中村明 (1979) 『感情表現辞典』 六興出版
- 中村平治 (1982) 「言わないでおくことの文法と含意(1)」『英語学論説資料』15 第一分冊 論説資料保存会
- 中村芳久 (1981) 「沈黙の意味解釈」(1)『英語学論説資料』15 第一分冊 論説資料保存会
- (1982) 「前提と論理的含意」—意味理論に向けて— 『英語学論説資料』17 第一分冊 論説資料保存会
- 沼田善子 (1986) 「とりたて詞」『いわゆる日本語助詞の研究』 凡人社
- 芳賀綏 (1978) 「陳述とは何もの?」『日本の言語学』第三巻 文法Ⅰ 大修館書店
- 蓮沼啓介 (1984) 「情報革命と日本語学」『日本語学』3巻4号
- 林四郎 (1983) 「日本語の文の形と姿勢」 日本語教育指導参考書11 『談話の研究

と教育1』 国立国語研究所

- 林四郎, 萩野綱男, 田中幸子, 樺島忠男 (1983) 『朝倉日本語講座 運用』 朝倉書店
- 三戸雄一 (1977) 「日英語と翻訳試論」 『英語学論説資料』 11 第一分冊 論説資料保存会
- 南不二男 (1983) 「談話の単位」 日本語教育指導参考書11 『談話の研究と教育1』 国立国語研究所
- (1984) 「理解のモデルについてのおぼえがき」 『金田一春彦博士古稀記念論文集』 三省堂
- (1985) 「質問文の構造」 『朝倉日本語新講座』 4 文法と意味Ⅱ 朝倉書店
- 宮田幸一 (1980) 「格助詞と取り立て助詞」 『言語』 Vol. 9, No. 12
- 村木正武, 斉藤興雄 (1978) 『意味論』 (現代の英文法2) 研究社出版
- 毛利可信 (1980) 「語用論とはなにか」 『言語』 Vol. 9, No. 12
- (1983 a) 『英語の語用論』 大修館書店
- (1983 b) 『橋渡し英文法』 大修館書店
- 茂呂雄二 (1984) 「テキスト・談話論の用語」 『言語生活』 393
- 安井稔 (1978) 『言外の意味』 研究社出版
- 吉田夏彦 (1985) 「哲学の立場から」 『朝倉日本語新講座』 4 文法と意味Ⅱ 朝倉書店
- 渡辺実 (1971) 『国語構文論』 塙書房
- (1978) 「叙述と陳述—述語文節の構造」 『日本の言語学』 第三巻 文法Ⅰ 大修館書店

資料の出典

- 安部公房 『砂の女』
- Saunders, Dale *The Woman in the Dunes*
- 太宰治 『人間失格』
- Keene, Donald *No Longer Human*
- 遠藤周作 『沈黙』
- Johnston, William *Silece*
- 井上靖 『敦煌』
- 『狼銃』
- Yokoo & Goldstein *The Hunting Gun*
- 川端康成 『眠れる美女』
- Seidensticker, Edward *House of the Sleeping Beauties*

- 黒柳徹子 『窓ぎわのトットちゃん』
Britton, Dorothy *Totto-chan, The Little Girl at the Window*
三島由紀夫 『金閣寺』
Ross, Nancy Wilson *The Temple of the Golden Pavilion*
夏目漱石 『坊ちゃん』
Turney, Alan *Botchan*
大江健三郎 『万延元年のフットボール』
Bester, John *The Silent Cry*
(以上、英訳出版は講談社インターナショナル)
宮島達夫 (1972) 『動詞の意味用法の記述的研究』 国立国語研究所
中村明 (1979) 『感情表現辞典』 六興出版
西尾寅弥 (1972) 『形容詞の意味用法の記述的研究』 国立国語研究所
西原 & 杉浦 *Examples & Exercises* 国際基督教大学日本語副教材
尾野秀一 (1984) 『日英撥音撥態語活用辞典』 北星堂